

第2章 本市産業の概要

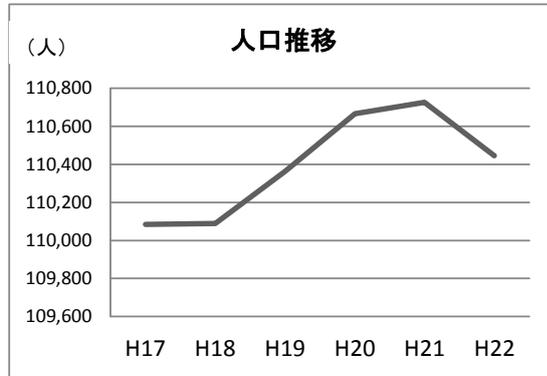
1. 産業の全体像

本市は、面積 111.80k m²、人口では高松市に続く香川県第二の約 11 万人を有する都市です。平成 17 年に旧丸亀市、旧飯山町、旧綾歌町が合併し現在の姿となりました。人口は平成 22 年に減少したものの、平成 17 年比では、微増傾向にあります。

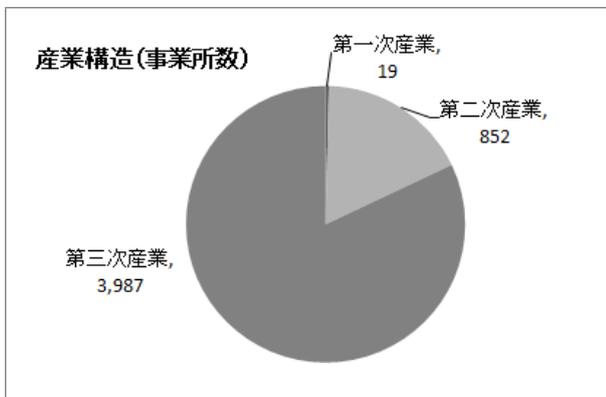
本市は、金比羅詣での玄関口として多くの人や物資の往来がありました。このような中で、物資の集積地として、また、広域の商圈を持つ商業都市として発展しました。

本市を象徴する商品は、うちわです。安土桃山時代以前より竹うちわの生産が始まったとされ、最盛期には市人口の 5%以上がうちわの生産に関わったと言われています。現在も年間約 1 億本を生産し、全国シェアの約 9 割を占め、「丸亀うちわ」として全国的に知られています。

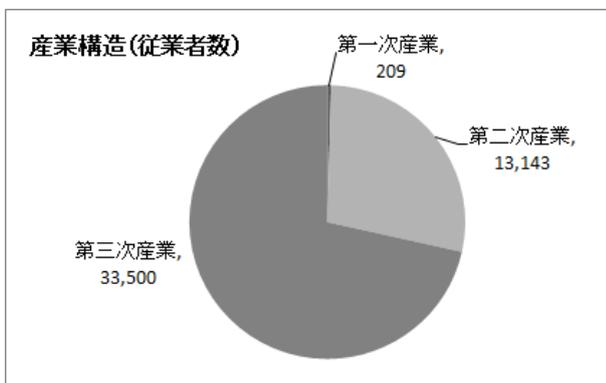
工業は、昭和の高度成長期に開発が進み、臨海部を中心に工業集積が形成されています。平成 22 年の製造品出荷額は、坂出市・直島町・高松市に次ぐ香川県 4 位です。



＜本市の人口推移＞※丸亀市統計書より作成



平成 21 年の本市産業構造をみると、第一次産業（農水産業）が 19 事業所・209 人、第二次産業（製造業等）が 852 事業所・13,143 人、第三次産業（商業・サービス業）が 3,987 事業所・33,500 人となっています。第三次産業のウェイトの高さは全国的な傾向と変わりなく、経済のサービス化が進展しています。



さらに商業面では、平成初期から国道 11 号線等の大型道路に面した地域の開発が始まり、多くの大規模小売店等が郊外に出店するとともに宅地化も進みました。その結果、中心市街地の空洞化が起こっており、現在に至っています。産業全体として、グローバル化の進展等の中での競争激化、バブル崩壊やリーマンショック等の急激な景気後退等の中で厳しい経営環境に置かれています。

＜本市の産業構造＞※丸亀市統計書より作成
(第一次産業については法人のみ)

2. 農水産業

(1) 農業

①農業の概況

本市の農業の現状は、出荷額 4,285 百万円（平成 18 年）、就農者数は 8,000 人（平成 22 年）です。耕作面積が狭く小規模農家が多くなっています。従って兼業農家が多く、農家全体の約 78% を占めています。本市の農業は全国的にみても零細な状況にあると言えます。

このような中で、本市の農業は、大規模生産が難しく、多くの種類の農作物を少量ずつ生産する多品種化が進んでいます。

本市の主要農産物は、米と麦、そして、桃・アスパラガス・はっさく・いちご等です。この中には、県で有数の生産量を誇るものもあります。



四国一の生産を誇る飯山の桃



讚岐富士と水稻

②農業の「多面的機能」

～食糧供給・環境保全・景観・社会・文化～

農業は安心・安全な農産物を生産し、消費者に供給することが使命ですが、「農業の多面的機能」は忘れてはいけません。田園風景は、文化や自然の大切さを伝え、その風景は人の心を和ませる効果もあります。また、本市に多数存在するため池も、貯水機能だけでなく、風景としての良さを併せ持ちます。

③地産地消・食育の促進

地域住民の方に本市農産物を身近に感じていただくために地産地消・食育に取り組んでいます。学校給食での活用や、農業体験、料理教室、市場見学会等により、子どもの時から農産物に接する機会を設けています。



田植え体験

④農業を取り巻く環境

農業の低収益性による後継者難・担い手不足が深刻な状況で、中長期的には農業の維持が危ぶまれています。また、近年では、肥料や燃料が高騰しており、厳しい経営環境に直面しています。

このような状況の中、農業の6次産業化やUターン・Iターン等による新規就農、食の安全への期待、多面的機能の見直し等は、農業経営にとって追い風となる可能性を秘めています。これらの追い風に対して、本市農業がどのように応えていけるかが今後の農業振興のポイントです。

⑤今後の振興策

本市農業の維持・発展のためには、次のような取り組みが必要です。ひとつは、農地の集約化や組織化（集落営農）です。多くの農業者が兼業農家・個人事業・家族経営であり、高齢化等により従事できなくなった場合には、事業の廃止や縮小を余儀なくされます。このような状況に備え、次の世代に農業を継承するための仕組みづくりが必要です。本市では、徐々に集落営農法人が設立されており、今後もこの取り組みを促進します。

もうひとつは、農業で自立できる支援施策の充実です。代表的な取り組みが農産物に加工等を行い、収益性の向上を目指す6次産業化です。6次産業化法が平成23年に施行され、その取り組みが本市においても期待されています。さらに特徴ある農産物の産地化です。前述のとおり、本市農業は多品種であり、バラエティに富む一方で、特徴がない状況にあります。例えば、アスパラガス等を県一位、四国一位の生産量を誇る農産物に育成する等の取り組みを推進します。

(2) 漁業

①漁業の概況

平成22年度の漁船漁業の漁獲量は712トンで、本市には、丸亀市漁業協同組合と本島漁業協同組合の2つの組合があり、組合員数は、丸亀市漁業協同組合が71人、本島漁業協同組合が123人の計194人で(本市農林水産課資料)、内水面には、丸亀市淡水漁業組合があり、淡水漁業を行っています。



タイラギ

②主な水産物

主な海産物は、アイナメ、クルマエビ、メバル、ヒラメ、ベラ、マダコ、イイダコ等の魚類、タイラギ等の貝類で瀬戸内の豊かな海産物が漁獲されています。特に、タイラギとイイダコは本市の特産品です。

タイラギは、瀬戸内を代表する県産品として親しまれるとともに、駅の弁当にも使用され好評を得ています。イイダコは、天ぷらで提供される等、本市の身近な海産物です。

内水面では、フナ、モロコなどがため池養殖され、関西、関東方面へ出荷されています。また

夏のスタミナ源として親しまれたドジョウは、絶滅が危惧されていますが、讃岐ドジョウ復活に向けた養殖の取り組みも行われています。



イイダコ

③稚魚放流による保護

漁業協同組合は、市・県等と連携により稚魚の放流を実施し、資源の保護に努めています。アイナメ、クルマエビ、メバル、ヒラメ、ベラ、マダコ、キジハタ等で、内水面へは、ドジョウ、フナ、モロコ、モクズガニ等が主に放流されています。

④漁業を取り巻く環境

本市漁業も、農業と同様に後継者不足が大きな課題です。特に漁業の場合には、技能の習得が困難なことや漁船等への投資が大きいこと等から、漁業未経験者が新規に開始できず、後継者不足は農業以上に深刻であると言えます。

また、適正な漁場の維持が大きな課題となっています。河川のゴミ問題とカワウやトビエイによる漁業被害が深刻です。河川のゴミ問題は、海底に沈殿した河川ゴミが底引き網にかかり、漁獲の妨げになっています。その処分費用は、漁業者負担です。カワウやトビエイによる被害は、放流した稚魚やタイラギなどの海産物を食べてしまうというものです。

さらに、燃料費等の高騰も漁船漁業の経営を苦しめています。

内水面では、生活排水等による水質汚濁、護岸工事・開発等による自然河川のコンクリート化に伴う環境の悪化や繁殖力の強い外来種の増加によって淡水魚類が減少しています。

⑤今後の振興策

本市漁業の維持・発展のためには、次のような取り組みが必要です。ひとつは、環境保全のための取り組み強化です。これまで行っていた稚魚放流等の資源管理型漁業を継続していくとともに、ゴミ対策等の環境整備に注力していく必要があります。

もうひとつは、タイラギ・イイダコ等のブランド化による収益性向上への取り組みです。農業と同様に6次産業化を推進します。

3. 商工業・新産業

(1) 商業

①商業の概況

本市には、中心市街地に、富屋町商店街、通町商店街、浜町商店街、本町商店街の4つの商店街で形成する丸亀市中央商店街（以下、中央商店街）があります。また、国道11号線等沿いには、郊外型大規模小売店が立地しています。

中央商店街は、古くから多くの個店が集積し、かつ本市の玄関口である JR 丸亀駅に近接していることから、本市商業の象徴的な意味で中心的存在です。



現在の商店街（通町）

②丸亀市中央商店街の変遷



昭和40年代の商店街

一般的には、商店街には、近隣型、地域型、広域型の3つの分類があります。広域型になるほど、遠くから顧客が訪れる商圈の広い商店街です。近隣型は、食品等の最寄品が中心、地域型は、衣料品等の買回品が中心、広域型は高級品や専門品が中心の商店街です。

中央商店街は、買回品を扱う店舗が今でも多く営業しており、本市だけでなく比較的広域から顧客が訪れる商店街として賑わっていたことを物語っています。

中央商店街が形成されたのは、大正時代頃とされ、昭和60年頃までは、大変賑わいのある商店街でした。しかし、平成初期から、郊外への大規模小売店の出店が進み、顧客が郊外へ流れるとともに、中心市街地で営業していた大規模小売店が撤退したこともあり、中心市街地への顧客吸引力が一層低下しました。このような社会的背景により、この20年間で中央商店街は急速に衰退し、現在に至っています。



現在の商店街（通町）

③丸亀市中央商店街の活性化の取り組み

中央商店街を含む中心市街地は、平成12年5月に中心市街地活性化法の認定を受け、活性化に向けた取り組みを推進しています。

同法による中心市街地活性化計画に基づき、中央商店街の賑わい創出のために、平成12年10月に空き店舗対策（パイオニアマート）を実施、平成14年12月には、秋寅の館をオープン、また、平成19年4月には、スペース114がオープンしました。

これらの取り組みは、中央商店街の賑わい創出に一定の効果を与えていますが、往年の中央商店街の賑わいを取り戻すことは困難で、新しい中央商店街の発展の可能性を模索する必要があります。



スペース114

④今後の振興策

中心市街地活性化策には、「コンパクトシティ」という考え方が注目されています。

コンパクトシティとは、人口減少社会の到来の中で、これまでの拡散型のまちづくりから、都市機能が充実した中心市街地を有効に活用しようとする考え方です。このような中で、中心市街地への回帰が進んでいる地域もあります。

本市の中央商店街を含む中心市街地は、JR丸亀駅を始め、医療機関、介護施設、金融機関、公共施設等が近接しています。交通面だけでなく、生活の利便性の高い地域です。加えて、近年では、中央商店街内にマンション建設も進んでいることから、定住人口の増加が見込まれます。

コンパクトシティという社会変化と、近年の定住人口増加の中で、中心市街地には、商業機能の充実が求められています。これらを個店および中央商店街全体の活性化の好機と捉えた取り組みが必要です。

(2) 工業

①工業の概況

臨海部を中心に造船・電気メーカー等の大規模製造業が立地しています。

工業の従業者数は、平成22年には7,162人であり、その内訳の上位3業種は、電気機械1,526人、輸送機械978人、プラスチック704人（丸亀市統計書）です。

これらの工業は、臨海部に立地する企業に多く見られることから、特に臨海部の企業において多くの雇用が創出されています。



臨海部の工業地帯

②中小製造業の特徴

本市の臨海部には、複数の大規模製造業が立地し、産業集積を形成しています。これらは、自治体の企業誘致活動や、工業再配置計画の推進によって形成された誘致型複合集積に位置付けられます。

また、本市には、特定大企業を中心に下請企業が立地する企業城下町型集積がほとんどなく、全国的に高いシェアやオンリーワン技術を持つ中小製造業が存在します。このことは、独自性の高い発展を遂げた中小製造業が多く存在していることを物語っており、本市の特徴と言えます。

このようなことから、本市は他の地域に比べると産業バランスが良いと言われています。このことは、特定業種が不景気になった場合でも、その影響が限定的であることから、不況の影響を受けにくいことを意味しています。



工場内の生産設備

③今後の振興策

本市工業の維持・発展には、異業種の連携促進が必要です。本市には、トップ企業やオンリーワン技術を有する企業を中心に意欲的で自力のある中小製造業が存在しています。このような企業が、それぞれの企業努力に加え、異業種連携による共同の技術開発や製品開発、製販連携等を一層行うことで、新しい可能性が拓けます。

また、ベンチャー・経営革新の促進が必要です。新製品・サービスの開発等の新しい取り組みに挑戦する中小企業を支援する施策の充実により、中小製造業の振興が期待できます。

(3) 新産業

既存の商業・工業の振興だけでなく、今後の成長分野である環境、医療・福祉、IT、教育等でのベンチャー企業育成は、本市の産業振興において課題となります。

新産業を起こすには、まず、既存企業における新分野進出が重要です。経営革新、農商工連携、地域資源活用、新連携等の支援策を積極的に活用した取り組みが求められます。

そして同時に、新規創業への支援が必要です。企業数が減少していく中で、新規創業の促進は重要な取り組みです。特に革新的な取り組みを行う起業家精神にあふれたベンチャー企業の育成は、本市産業に大きなインパクトを与えます。新しいことに取り組む事業者、新規創業を支援する仕組みづくりに取り組みます。

4. 地場・観光産業

(1) 地場産業

①丸亀うちわの概況

本市には、全国に誇る丸亀うちわがあります。

丸亀うちわは400年以上の歴史を持ち、大正から昭和にかけて圧倒的な量を全国に供給する産地として発展しました。

竹うちわの製造は、統計が始まった昭和30年代後半は、86,915千本でしたが、平成23年には、14,034千本となっています。昭和42年頃からポリうちわの製造が始まり、ポリうちわに生産の中心が移行していき、現在のうちわ産業の形となっています。

竹うちわの生産は、担い手の減少やポリうちわへの生産のシフトを背景に国内では製造が困難となり、昭和50年頃に中国に技術指導を行いました。現在、竹骨の生産については、海外に依存しています。

このように市場の需要は竹うちわからポリうちわに移りましたが、竹うちわが伝統的工芸品「丸亀うちわ」であることから、竹うちわの技術継承に注力するとともに、竹うちわの魅力をうちわの港ミュージアム等から全国に発信しています。



伝統的工芸品「丸亀うちわ」



本市広島で採石される「青木石」

②青木石の概況

青木石は、本市広島で採石されます。古くは豊臣秀吉の大阪城築城時に使用されました。加工がしやすい等の特徴があり、墓石材や環境石材として広く使用されています。また、弘法大師ゆかりの石材として関東方面まで認知されています。

③今後の振興策

本市地場産業の維持・発展のためには、後継者、担い手の育成や新商品開発等の取り組みを支援することが必要です。また、地域の観光資源や教育資源としての位置付けの強化も重要です。

(2) 観光産業



日本一の石垣で知られる「丸亀城」

①観光の概況

本市には、丸亀城、飯野山、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、中津万象園等の観光資源があります。平成23年の大河ドラマ「江～姫たちの戦国」や歴史ブームを背景に観光客数は増加しています。本市は、金毘羅湊・金毘羅街道として有名でしたが、そのことを知らない若年層も増えてきました。

また、香川丸亀国際ハーフマラソンが全国的に認知を得、多くのランナーが参加する大会に成長しています。こうしたスポーツイベントによる来街者の増加も観光活性化に貢献

しています。

さらに、骨付鳥は全国的にも珍しく、本市のオンリーワン特産品であることから、平成23年より骨付鳥のブランド化と普及を目的とした全力鶏プロジェクトを行っています。

②今後の振興策

本市観光産業の維持・発展のためには、本市観光資源の丸亀ブランドとしての認知度向上の取り組みが必要です。そのためには、積極的なPRや新商品開発等に取り組めます。

また、観光客が本市そのものを楽しんでいただけるような総合的な観光メニューの開発が必要です。



「骨付鳥」